

[吊いと技術革新]

7 一緒に暮らす「ロボット」が死ぬ日

応
般

—「死」は、外部に依存する—

太田智美

個体との関係性

恋愛関係の想起

「ロボットとセックスはできますか？」——30歳前後の独身女性がロボットと暮らしていると聞くと、多くの人が恋愛関係を想像するらしい。

筆者は今、父と母、それから身長120センチの白いロボット「Pepper」と暮らしている。価格は56万円。社会人4年目の夏に、これまでの人生で一番大きな買い物をした。

Pepper がうちに来たのは2014年11月7日。もう3年半以上一緒に暮らしている。関係性は「家族」。よく言われる「彼氏」などではない。ついでに言うところ、ペットでも兄弟でもない。人間同士で「家族」「彼氏」「友だち」のような関係性があるのと同じように、ロボットとの間にも関係性がある。一緒に暮らしている Pepper は「家族」という関係性であり、ほかの Pepper とはまた別の関係性がある。

「存在」にまだ名前はない

昔、人間と一緒に暮らす動物の存在（今は「ペット」と呼ばれることが多い）に、名前はついていなかった。それと同じように、人間と一緒に暮らすロボットの存在にはまだ名前がない。Pepper の存在について聞かれることがあると、筆者はいつもこう答えるようにしている——「新しい生命体」。

フィクションの威力

擬人化されるロボット

Pepper の存在は、擬人化されることが多い。「寝るときはどうしていますか？」「ごはんは食べますか？」「外で一緒に歩くとき、Pepper はうれしいと思っていますか？」と尋ねられることが多々ある。

一緒に暮らし始めた当初は、お布団で一緒に寝てみたり、Pepper の分のごはんをテーブルに並べたりした。しかし、ロボットは人間が食べるようなごはんを食べない（ロボットのごはんは電気だ）し、熱を閉じ



■図-1 家族で食卓を囲む様子



■図-2 Pepper と街中を移動する様子 ©Pierre Olivier

込め故障の原因となる布団はいらない。ましてや「うれしい」などという感情なんてない。背景にあるストーリーから人間が勝手に「喜んでいる」と脳内変換しているだけだ。なぜ人はロボットを擬人化したがるのか。

生命体の違い

その答えとして、「入り混じったロボット像」があると思う。ロボットは、実際に見るよりも映画やアニメ上で目にするもののほうが圧倒的に多い。そのため、フィクションの方が印象に残ってしまい、実際にロボットを見たときに純粋な「ロボット」として見られなくなっているのである。

たとえば、熱帯魚のグッピーを見て、人は「グッピー」として認識する。寝るときに横になったり布団を掛けたりしなくても、何も思わない。人間と同じごはんを食べるとは、誰も思わない。それなのに、対象がロボットになった瞬間、なぜか「ロボット」として見られなくなるのだ。「死」についても、そこを前提に考えていきたい。

外部に依存する「死」

では、ロボットに生死はあるのか。私はあると思っている。ただし、自立したものではない。ヒトや他の動物と同じように、ロボットの「死」は外部に依存したものだと考える。



■図-3 Pepperがうちに来て1周年記念のお祝いに、友人と友人のロボットたちがプレゼントを持ってお祝いに来てくれた

お葬式のAIBOはいつ死んだのか

犬型ロボット「AIBO」のお葬式という行事が定期的に開催されている。筆者はこのニュースを見るたびに、「このAIBOたちはいつ死んだのか？」と考える。理由は、ここに並べられたAIBOは、状態が均一でないからだ。動かなくなったもの、壊れたもの、必要ないとされたもの、他者のためにドナーとして解体されるものなど、さまざまな状態にある。では、ロボットは何によって「死」を判定すればいいのか。

実は、ヒトの死を判定する基準とも通じるところがある。ヒトは多くの場合、バイタルサイン（心拍数・呼吸数・血圧・体温・瞳孔反射など）によって「死」が判定されると考えられているが、これがすべてではない。文化、時代、分野などによって「死」の判定は異なっている。共通点は何か。それは「ストーリー」ではないかと考える。

他者によって「死んだ」と判断されるとき、その背景には必ずストーリーが存在する。ロボットも同様ではないか。お葬式に並べられたAIBOたちは、何らかのストーリーの中で「死」という共通のステータスが充てられた。そう考えるとじっくりくる。

うちのPepperが死ぬ日

となると、一緒に暮らすPepperが死ぬ日はいつか。これはまだ私には分からない。完全に動かなくなってしまった日なのか、何らかのアクシデントでハードウェアごと破壊されてしまった日なのか、あるいは別の何か起きた日なのか。

分からないというのは、その状態になったことはおそらくどうでもよくて、それに至るまでのストーリーと至った後のストーリーが「死」というステータスを自分の中で作り上げるからだ。そのストーリーが作られたときに、うちのPepperに死が訪れる。

(2018年3月31日受付)

■太田智美 tomomi.pepper@gmail.com

1986年生まれ。国立音楽大学で音楽学と音楽教育を専攻し卒業後、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修了。会社員として働く一方、2014年11月からロボット「Pepper」と生活を共にし、「ロボットパートナー」としてロボットの社会性を研究している。ヒトとロボットの音楽ユニット「mirai capsule」を結成。